フルートと管弦楽のための協奏曲

W.A.モーツァルト

Konzerte für Flöte und Orchester
Wolfgang Amadeus Mozart

◆◆第1回

講師・有田正広

1780年頃のモーツァルト一家
左より　姉ナンネル、ヴォルフガング、父レオポルド、壁に母アンナ・マリア

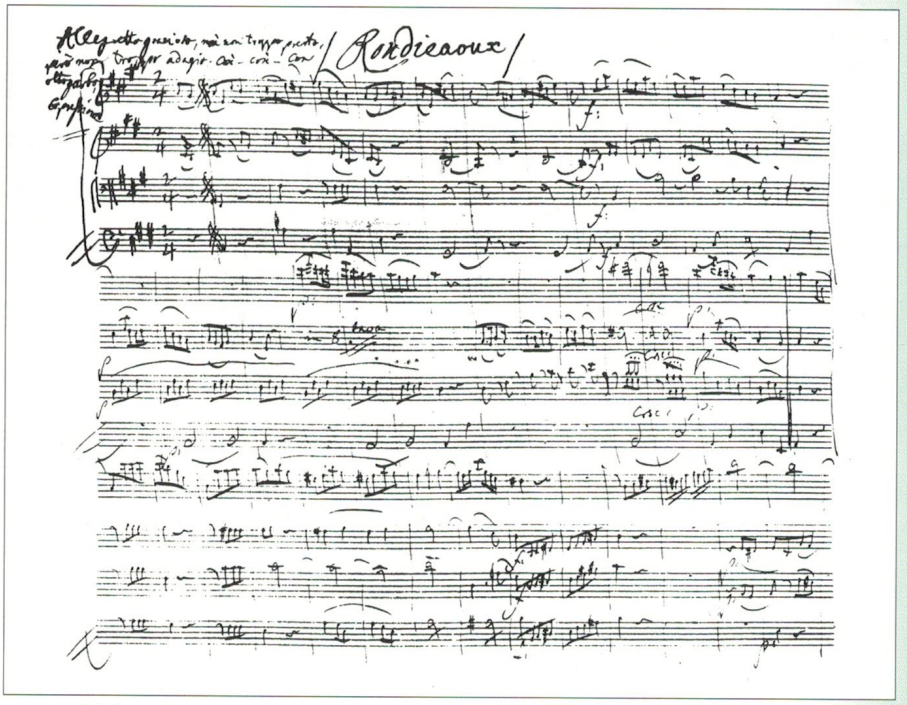
今回から、モーツァルトのフルート協奏曲 第1番と第2番を取り上げます。どちらも皆さんが聴く機会、演奏する機会の最も多い曲だと思いますが、その成立にまつわる話は大変に複雑で、謎の多い作品です。

モーツァルトは、1777年9月23日に母のアンナ・マリアと共にザルツブルクを離れ、アウクスブルク、マンハイムを経てパリまでの「就職の旅」、別名「青春の旅」に出ました。この2つの協奏曲はその旅の途中のマンハイムで書かれたと言われています。モーツァルトはマンハイムで宮廷オーケストラの第1フルート奏者、ヴェントリンク[Johann Baptist Wendling, 1720-1797]と知り合います。残されたモーツァルトの手紙の中で「大変優れた音楽家」「好人物」として何度も登場しするこのヴェントリンクの紹介で、モーツァルトはアマチュア・フルート奏者のインド人ことドゥジャン[F.Dejean](東インド会社に勤めるオランダ人で、デ・ヤーンのフランス読み)と知り合います。モーツァルトは、1777年12月10日の手紙に、ドゥジャンから短くて簡単なフルート協奏曲3曲と一対(Ein Paar)の四重奏曲を200フローリンの報酬で作曲依頼を受けたと書いています。この"Ein Paar"が何曲なのかは諸説がありますが、200フローリンを今日風に換算すると、ほぼ200万円になります。しかしこの作曲はなかなか捗らず、ザルツブルクに居た父レオポルトは業を煮やし、何度もモーツァルトに「金になる仕事を一生懸命にやれ」と手紙で書き送っています。それに対してモーツァルトは、気の進まない仕事の理由として、フルートを「頭がおかしくなる楽器」と書いたのはよく知られた話です。しかし、今では様々な角度から検討することによって、作曲の気が進まなかったのは単に楽器のせいではないということが分かってきています。

モーツァルトはマンハイムに来るまで、プロフェッショナルなフルート奏者との関係がほとんどありませんでした。当時のオーケストラでは、オーボエ奏者、或いはその他の楽器奏者が第2楽器としてフルートを演奏するのが一般的でした。フルートという楽器はオーケストラの中ではまださほど重要な地位を占めてはおらず、経費の上からも専門のフルート奏者を雇い入れることは少なかったのです。この事情はザルツブルクも同じで、マンハイムでヴェントリンクという、おそらく初めて耳にしたであろうプロフェッショナルなフルート奏者の演奏を目の当たりにしてモーツァルトは驚き、「素晴らしい音色と表現力、そして何より音程が確実で、アーティキュレーションの美しさ、見事さ」「これほどのフルートを聴いたことがない」と父親に伝えています。

モーツァルトは、それ以前のあまり嬉しくないフルートとの経験から「我慢のならない楽器」と言ったのではないでしょうか。さらにこのマンハイムの地で、後の奥さんの姉にあたるアロイジア・ウェーバーという、まだ16歳に満たない若いソプラノの少女に恋をしていて夢中になり、作曲どころではなかったのが実情のようです。

また、モーツァルトの他のフルート作品に目を移してみると、例えば4曲残されたフルート四重奏曲の中で、イ長調のKV 298はドゥジャンやマンハイムとは関係なく、モーツァルトが一人立ちした後の1786年、ウィーンで活躍している時期に書いたものです。また、ハ長調の四重奏曲は、ウィーン時代のオペラ「後宮



フルート四重奏曲　イ長調　K.298 終楽章の自筆譜〈オーストリア国立図書館蔵〉

モーツァルト時代の1鍵及び8鍵フルート

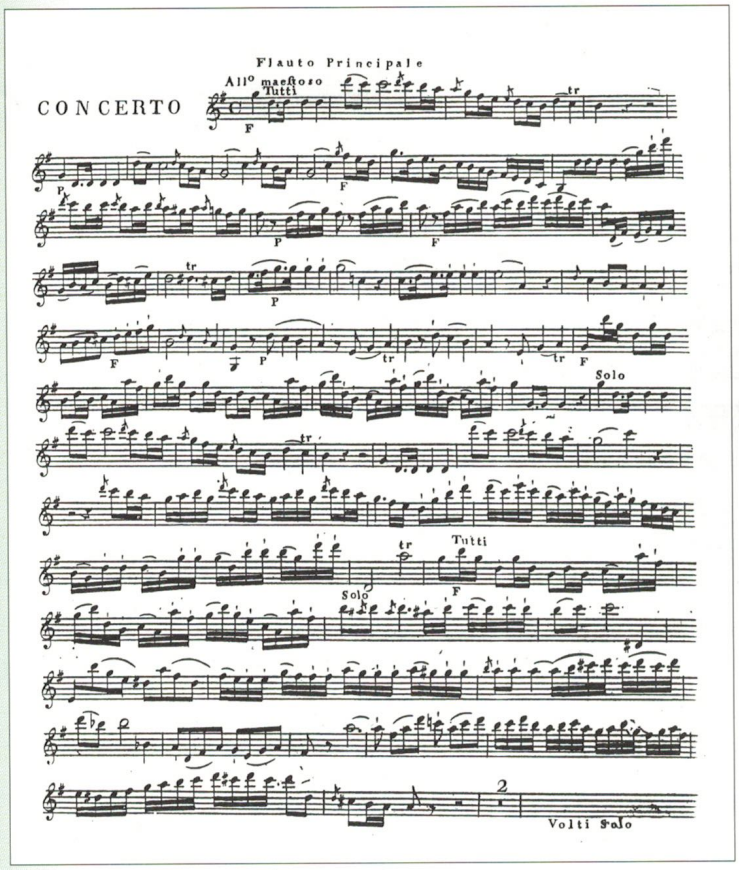
からの逃走」の中にそのスケッチが見つかっているので、ずっと後の時代に書かれた可能性が高いものです。マンハイムやドゥジャンと関係の無い時代にこのような作品を残していることからも、モーツァルトがフルート嫌いだったと考えるのは妥当ではないと思います。

こうした様々な状況の中でモーツァルトが実際にドゥジャンに渡した作品の数は、2曲のフルート協奏曲と2曲のフルート四重奏曲でした。この2曲の四重奏のうち1曲はニ長調KV 285で、残された自筆譜の1777年12月25日の日付から、モーツァルトがマンハイムからパリに向かう直前に仕上げていることがわかり、手紙の中でも触れています。ト長調の四重奏曲は19世紀の出版譜しか残されておらず、モーツァルトが書いた確証はありません。確実なのはニ長調の曲で、不確実ですがト長調の曲と合わせてドゥジャンに渡された四重奏はこの2曲と考えられます。しかもこのニ長調とト長調の四重奏曲は19世紀の出版譜では1曲の作品として楽章がまとめられていました。

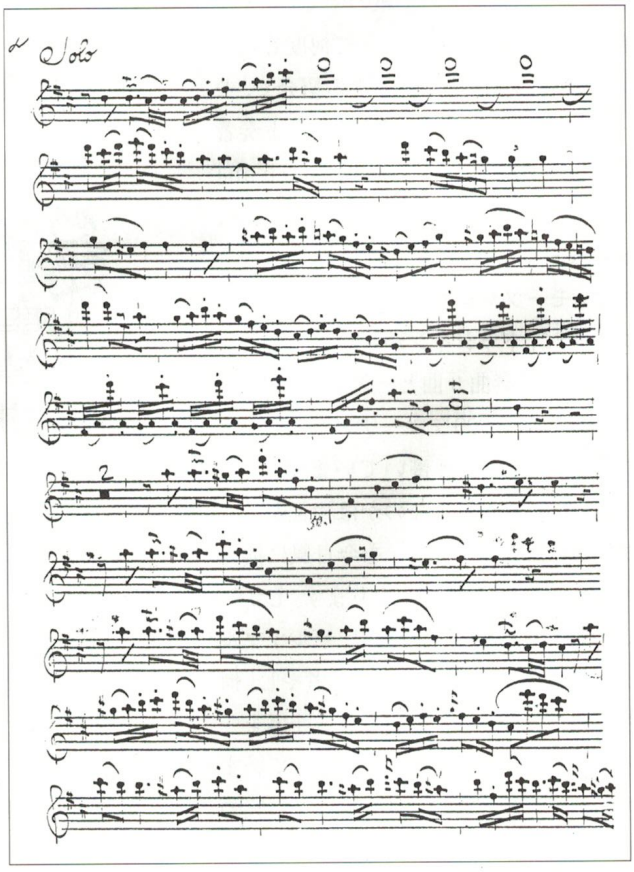
このような事情から、ドゥジャンはモーツァルトに約束の約半額の96フローリンしか払わなかったのだと思われます。

第1番のフルート協奏曲は自筆楽譜は失われていますが、1803年にブライトコプフ社から出版されたソロを含む全パート譜の銅版印刷された初版楽譜が残っています。また、第2番も自筆楽譜は失われていますが、1780年代から90年頃にかけて、ウィーンの宮廷の写譜屋がよく使う五線紙（ハプスブルク家が使用する紙とインクと五線引きを使ったもの）に写譜されたソロを含む全パート譜が残されていて、これが最も古い資料です。そしてそれを元に作られた19世紀に入ってからのスコアなどが現代の楽譜の底本になっています。

1920年に音楽学者のパウムガルトナー［Bernhard Paumgartner, 1887-1971］がハ長調のオーボエ協奏曲（KV 314／217k）の楽譜を発見し、それがニ長調のフルート協奏曲と同じ曲だったために、原曲はオーボエ協奏曲だという驚くべき説を発表しました。その理由の一つにニ長調の協奏曲はフルートの持つ音域を全部使っていないということを挙げ、さらにこの曲がオーボエ協奏曲の焼き直しであることをドゥジャンが知るところとなり、報酬を半額以下にされたのではないかと推論しました。確かにモーツァ



フルート協奏曲　ト長調　K.313（1778年1～2月?）〈初版譜　ブライトコプフ版　1803年〉



フルート協奏曲　第2番　ニ長調　K.314（1780～90年）〈筆写譜〉

ルトが父に宛てた手紙によって、マンハイムの宮廷オーケストラのオーボエ奏者ラム［Friedrich Ramm］がマンハイムで、モーツァルトのオーボエ協奏曲を5回演奏していることが分かっています。この時に演奏された曲がどの曲だかは不明ですが、パウムガルトナーはハ長調のオーボエ協奏曲が演奏されたと仮説を立てています。そしてニ長調のフルート協奏曲はオリジナルではないというレッテルが貼られました。しかし、実際にはどうであったかについては、様々な角度から慎重に検討して行かなければならないと思います。この点に関しては金昌国先生がジュピター出版から出版された「原版・モーツァルト／フルート協奏曲 ト長調・ニ長調」に詳しく書かれています。

また、ここで注目したいのは、1777年7月25日に、ザルツブルクのグセッティ宅で開かれた、モーツァルトの内輪だけの小さな演奏会です。これは姉のナンネルのために開いたもので、ザルツブルクの宮中顧問官のフォン・シーデンホーフェンが出席しており、彼がライプツィヒの出版社ブライトコプフに宛てた手紙が残っています。それによると「W.モーツァルトはナンネルのために1曲のシンフォニアとモーツァルト自身が弾いたヴァイオリン協奏曲、そしてもう一つ新作のフルート協奏曲が演奏された」とあります。メンバーはザルツブルクの宮廷楽団の有志たちで、フルートを吹いたのは新任コントラバス奏者のジョゼフ・トーマス・カッセルでした。つまり1777年に入団したコントラバス奏者はフルートも上手ではあるが、コントラバス奏者として入っており、フルートの腕前はプロ級ではない、そういう演奏者のためにモーツァルトはフルート協奏曲を1曲書いているわけです。

この時期にモーツァルトはザルツブルクの宮廷に何度か休職願いを出しています。領主のコロレド大司教がなかなか認可しないので、フォン・シーデンホーフェンにその口添えを頼むためにナンネルの誕生日の祝いに招待したと考えられ

コロレド大司教

ますが、結果は約2ヶ月かかって9月6日に、最終的には父レオポルトの手紙によって長期休職願いが受理され、9月23日未明にモーツァルトは母と共にアウクスブルクに向けて旅立つことになります。

グセッティ家で演奏されたフルート協奏曲がどの曲かは特定されていませんが、モーツァルトは旅立つに当たって、それまでに作曲した総ての楽譜を準備してトランクに入れているので、この25日にグセッティ家で演奏された曲の楽譜もこの中に入っていたはずです。アウクスブルクを経てマンハイムに行き、ドゥジャンに依頼された曲、おそらく彼は四重奏もなかなか思うように書けなかったということもあって、ザルツブルクで作曲したフルート協奏曲をドゥジャンに渡したという新たな考えも浮かびます。もちろんそれをグセッティ家で演奏したフルート協奏曲と関連付けるのは100パーセントは出来ないまでも、かなりの確立で、このグセッティ家で演奏されたフルート協奏曲がニ長調の曲ではないかと思いますし、そうした意見が最近の研究の中で囁かれているのも事実です。そう考えるとパウムガルトナーが指摘した、フルートの全音域を使っていないということや、様々なフルート・パートの音型の問題も、モーツァルトがカッセルのフルートの腕前を考えてのことだったという説明で納得が行くように思います。

それに対して、ト長調のフルート協奏曲のフルートの音域はニ長調のフルート四重奏のフルート・パートに非常に近く、例えば当時の楽器では難しいf'''の音がこの2曲には何度か出てきますが、ニ長調のフルート協奏曲には出てきません。ト長調のフルート協奏曲は非常に高い技術を要する曲として書き上げられています。

マンハイムでヴェントリンクの演奏によってプロフェッショナルなフルートの洗礼を受けたモーツァルトは、ト長調のフルート協奏曲をドゥジャンの依頼によって作られたとはいえ、ドゥジャンのフルートの技量とは別に、ヴェントリンクの腕前に影響されて作曲したのではないでしょうか。

このように、ざっと見ただけでも、2曲のフルート協奏曲の成立には複雑な問題があります。興味のある方には、ご自分で様々な資料に当たってみることをお奨めします。これらの曲に関する書物のほかに、白水社の「書簡集」（海老沢敏：監修翻訳／全6巻）の第3巻にはフルートに関する記述が多く、春秋社の「モーツァルトは語る」（ロバート・マーシャル著）にも若干の記述が見られます。

次回から、演奏上の問題にはいりましょう。

有田正広（ありた まさひろ）
昭和音楽大学教授
桐朋学園大学古楽器科講師